

博物館における先住民族表象

—外国の博物館展示事例から—

本 多 俊 和¹⁾・謝 黎²⁾

Representation of Indigenous Peoples in Museums Abroad

STEWART Henry & Xie Li

ABSTRACT

We report the results of field research concerning representation of Indigenous peoples in 24 Canadian, Northern Europe, Southern Europe, Western Europe and Chinese museums. We found that in Canada the history and contemporary situation of Indigenous peoples is represented, as well as atonement for colonial treatment. Excepting Northern Europe, European museums did not represent as a category Indigenous peoples, and no European museums dealt with nor represented past colonial practices concerning Indigenous peoples. Representation of Minority peoples in Chinese museums varied according to the institution.

要 旨

本論では、カナダおよびヨーロッパと中国の博物館を調査して、先住民（中国では少数民族）に関する展示の類似点と差違点を明らかにした。カナダでは、先住民の歴史と現代が明確に呈示され、過去の植民地支配に対する謝罪の意が展示に示されている。北欧の博物館では、先住民の歴史と現代が展示されているが、旧植民地的な状況に関する展示はごく少ない。北欧以外のヨーロッパでは、多くの博物館において先住民というカテゴリーもなく、旧植民地を肯定的に展示するスペイン以外の国では植民地は展示の対象とされていない。中国では、展示構想と内容は博物館によって異なっていることが判明した。

I. まえおき

博物館には自然科学と社会・人文科学の多くの分野を網羅する総合博物館、あるいは特定の分野を扱う専門博物館や民族（誌）を扱う民族博物館があるが、本論では（旧）植民地における先住民を展示する旧宗主国の国公立博物館を対象として考察するものである。国公立博物館を中心に調査を行なった理由は、国公立の博物館が先住民の歴史と国家における位置づけに関する主流社会の公式見解を反映しているという想定を設定したからである。

博物館は文化人類学（民族学）の視点から注目されてきた [たとえば、大阪人権博物館編2003；クリフォード2002；佐々木1986；吉田1996、1998；Ames 1992；Carbonell (ed.) 2004；Cummins to Arinze

(eds.) 1996；Karp and Lavine (eds.) 1991など] が、本論の課題の一つであるメディア媒体としての博物館という視点は、一般的に含まれることは少ない [cf. 原2004：95]。

本論では、博物館の役割の一つであるメディアとしての側面をとり上げ、国公立の博物館で先住民を展示する意義と、展示が来館者に与える印象（イメージ）をめぐる社会的な影響をとり上げる。つまり、先住民族に対する国民一般のイメージには、博物館が大きな影響を及ぼしているという、メディア媒体としての博物館の側面に注目する。展示品そのものではなく、展示全体の様子——展示ケースでどのような資料を列べるか、資料の時代選定など——から来館者が何を読み取るであろうかという視点から、考察を行なう。

国公立の博物館における先住民の展示の意義は、顕在的および潜在的に表象される主流社会の歴史的認

¹⁾ (スチュアートヘンリ) 放送大学教授 (「人間の探究」専攻)

²⁾ 放送大学非常勤講師

識を表現しているであろうことと、国家における先住民の政治的、社会的、法的な位置が暗示されているという前提で論を進める。

展示における社会的な影響に関しては、主に来館者が展示から何を読み取り、どのような印象を受け、先住民に対してどのようなイメージが形成されるかということに調査の主眼をおいた。なお、ミュージアム・マーケティングでよく行なわれるアンケート調査は時間的、そして制度的な制約のために実施できず、それぞれの博物館の館長や学芸員からの情報を加味して、展示のあり方から来館者が受けるのであろう印象を考察した。この方法はクリフォードの『ルーツ』[2002]に倣ったものである。

北アメリカとヨーロッパ7ヶ国、そして中国の博物館調査の成果を吟味した結果、調査に際して予想していたこと、すなわち植民地支配のあり方は、博物館における先住民の展示に反映されるという予想が当てはまらないことが判明した。つまり、植民地の歴史的な背景が必ずしも博物館における先住民の展示に投影されないことが明らかになった。

現代中国の領土内に住む、先住民に類する少数民族の居住地は植民地である（あった）かどうかという議論はさておき、中国の博物館展示に関する考察を加えた理由は、欧米の博物館の様子と社会主義国家中国の様子を比較するためである。結論を先に述べると、中国の博物館における展示は、ヨーロッパのそれとはほとんど同じであることが明らかになった。

本論文は、科学研究費補助金（平成10～12年度科学研究補助金（基盤研究（A）（2））、課題番号10041031（代表：スチュアート ヘンリ）「北アメリカにおける先住民族と国民国家の関係に関する人類学的研究」と、平成14～17年度科学研究補助金（基盤研究（A））、課題番号14251009「カナダにおける先住民のメディアの活用とその社会・文化的影響」（代表スチュアートヘンリ）の成果の一部である。

本論は放送大学研究年報24号でまとめた「アイヌ民族の表象に関する考察：博物館展示を事例に」[本多、葉月2007]の外国編であることを断わっておく。

II. 博物館における先住民展示：概観

博物館における先住民の展示に関して、カナダでは3ヶ所、デンマークとグリーンランドの2ヶ所、フィンランドの1ヶ所、西欧の3ヶ所、南欧の10ヶ所、中国の5ヶ所、計24ヶ所の博物館の展示を観察するとともに、可能な限り学芸員、もしくは館長に対してインタビューを行なった。

カナダでは先住民の伝統、歴史、植民地時代の状況と現代がわかる展示になっている。先住民の歴史に関する展示は、イギリスとフランスの植民地的な支配が諸民族に及ぼしたネガティブな影響を隠さず示されている。植民地支配による圧政、征討、強制同化などの展示には謝罪と贖罪の意識を表明して、20世紀後半

～21世紀における国家と先住民との新しい関係を築くために、展示を通じて来館者への啓発的な意図が込められている。とくに、先住民が現在も健在であり、近代国民国家に吸収合併された状況にあるが、「伝統」を継承しながら独自のアイデンティティを保持して、現代的な生活を営んでいることに重点をおく展示が心がけられていることがよくわかる。

一方、地理的にヨーロッパを便宜上、北欧（デンマークとフィンランド）、南欧（イタリア、スペイン、ポルトガル）、と西欧のイギリスとフランスに分けて考察する。それは、この3つの地域の博物館展示が異なる様子を呈しているからである。南欧の博物館では、過去の植民地支配およびその「先住民（族）」について、展示および資料解説パネルはほぼ皆無であったことにより、「南欧」3ヶ国をまとめて論ずることにした。

北欧の3つの博物館（コペンハーゲン、ヌーク、ヘルシンキ）では、カナダで観察された謝罪、贖罪の雰囲気はなく、主に民族衣装や生業活動に用いられた道具などの「伝統」的な様子を中心的に展示するのみであり、現代に関する情報が少ない、あるいは存在しないのである。ただし、ヌークの博物館展示には「現代」のコーナーがある。

南欧3ヶ国と西欧の博物館の調査では、北・中・南米やアフリカなどの旧植民地における先住民、もしくは植民地支配の下におかれていた集団に対する配慮はイタリア、スペインとポルトガルではほぼ皆無である印象を強く受けた。公式の見解ではなかったが、複数の関係者からは、旧植民地における当時の先住民の状況にふれることが南欧の博物館ではタブー視されている、あるいは植民地史を忘却（forget）、現在と切り離してしまう（disassociate）、意識しない、もしくは無視する、真正面から旧植民地の民族が経験したことをとり上げないのが、博物館における暗黙の運営方針であると打ち明けられた言葉が衝撃だった。

また、現在は世界の民族の支配・被支配関係はもはや解消されているので、今さら博物館における植民地史がどのように反映されているかという研究テーマ自体は時代遅れであり、無意味であると戒められたことすらあった。

西欧のイギリスとフランスでは、16～20世紀の間に行なわれていた植民地の支配史に関する展示はない。イギリスの大英博物館では先住民の現状が部分的に展示され、その「伝統的な知識」が現代社会に生きている側面を示す展示がある。一方、フランスのドゥ・ブランリー博物館では、旧植民地の民族資料を芸術品として扱い、博物館における植民地的な背景を忌避している様子である。

中国の博物館では、先住民族のカテゴリーは国策としてなく、「少数民族」を展示するかどうかについて意見が分かれている。

Ⅲ. 博物館における先住民展示の事例

A. カナダ

カナダ先住民は16世紀から植民的な状況におかれていたが、国家による本格的な支配は、1871年に連邦を結成したカナダが制定した1876年の「インディアン法」[加藤1990：64-71]による先住民の法的身分、行動、居住地（指定居留地）にまで規定する抑圧的な植民地政策にはじまったといえよう。

メティ（メイティ）が起こした19世紀後半の抵抗運動に対して軍が動員された[木村2005]事例を除けば、カナダの先住民は、イギリスがタスマニアの先住民（アボリジニ）に対して敢行した撲滅作戦「ブラック・ウォー」（1804～30年）や、1860～80年代にアメリカ合衆国が国軍を動員して行なった「インディアン掃討」政策のように皆殺しの対象となっていなかった。それでも、後述するようにカナダの先住民は、徹底した植民地的な状況の下で、たえずに同化させられる、主流社会に統合される対象であった。

1. カナダ国立文明博物館（Canadian Museum of Civilization、オタワ）

博物館における先住民に関する展示には、植民地支配型が影響を及ぼしている様子が見える（写真1）。徹底的な支配と厳格な同化政策を柱としたイギリス、そしてその方針を継承したカナダ政府による植民地経営が1960年代までつづいた。

1970年代以降の先住民運動の一環として、先住民の現実とのかけ離れた展示を改め、イギリスやフランスからの移住者とならんで、メティを含めて先住民もカナダの「建国の民」であるところと示す展示になっている。具体的には、主流社会に関する展示に匹敵する広さを先住民に関する展示にも割り当て、先住民が経験してきた植民地的な歴史と現代も展示するようになっている。先住民を過去に閉じこめるような展示ではなく、先住民が歩んできた歴史を先住民の立場を加味した視点から展示をして、そして独自の歴史と伝統をもつ先住民が現代を生きている様子を示している。



写真1

学芸員が先住民と協議して、先住民の歴史と現代からステレオタイプを排除する目的で採択された展示綱領に沿って、先住民の展示は更新されている。都市在住者を含めてカナダのすべての先住民の歴史の変遷、ヨーロッパ人の侵入とその影響、不平等条約、強制移住や指定居住地の様子などを示し、さらに先住民の現代と直面している課題に焦点を当てた展示構想である。

2. ローヤルアルバータ博物館（旧アルバータ州立博物館）(Royal Alberta Museum、エドモントン)

先住民の支配がとりわけ過酷であったアルバータ州にある当博物館では、植民地時代の圧政への反省が目につく。先住民を苦しめた強制移住や全寮制学校へ児童の強制就学という過去の圧政に対する反省と謝罪の雰囲気が展示ににじみ出ている。

たとえば、先住民の児童が強制就学させられた全寮制学校の歴史と悲惨さに関して、1900年ころの全寮制学校の模型など、当時の常設展がある。常設展の資料書類の学籍簿（写真2）には1898～1905年の間に入学した34名のうち、1900～1915の間に19名の「死亡」が記されている。死因は書いていないが、結核、栄養失調や苛烈な同化教育による文化喪失に起因する絶望による自殺が原因であるという研究成果がある。

そのほかに、先住民の食料源を断つために入植者による1880年代の大量バイソン（野牛）狩りの様子や、先住民の土地を農地に開拓する勧誘のポスターなどの展示もある（写真3、4）。

3. 北西準州立北方文化・歴史博物館（Prince of Wales Northern Heritage Centre、イエロナイフ）

カナダの諸北方民族の歴史と文化が主に展示されている。ヨーロッパ系カナダ人にとって住み心地がよくなかったこの寒冷地域では、1950年代までは植民地支配は比較的緩やかだった。そのためだと思われるが、文明博物館やアルバータ州立博物館のような、植民地支配による迫害を告発する展示が少なく、先史時代にさかのぼる先住民の歴史、「伝統」的な文化・社会の様子を示すディオラマ、そして現在の生活を中心とする写真展示になっている。



写真2



写真3



写真4

B. 北欧の博物館

ノース（バイキング）植民地が消滅した14世紀のあと、グリーンランドは18世紀に「再発見」され、デンマークによって再植民地化された。デンマークの宣教師エゲデ（Hans Egede）の率いるルーテル派教団は、グリーンランドの村々に教会と学校を作り、聖書や教科書をイヌイト語に訳した [Gad 1984]。集落ごとに学校が造られ、イヌイト語（イヌクティトゥット）で教育が行なわれ、1832年にイヌクティトゥットで書かれた教科書が発行されていた。このように、イヌイトの民族語を温存し、イヌイトの社会への干渉を少なくして、宗主国に依存しないよう従来の社会と生業活動を継続

させる支配であった。そのことが、イヌイトにおいて社会的な混乱が比較的少なく済み、18世紀後半にデンマーク領となった後もグリーンランドでは、武力的な衝突は起きていない。

1. デンマーク国立博物館（Nationalmuseet : National Museum of Denmark、コペンハーゲン）

19世紀から20世紀初頭にかけて収集されたグリーンランド・イヌイトの民族（民俗）資料はガラス・ケースで所狭しと列べられている。また、部屋の真ん中にある1.2×6メートルのケースには、服装をまとったマネキン30点がびっしり入っている、古典的な民族学博物館である（写真5）。イヌイト文化を専門とする研究者にとっては資料の宝庫であるが、一般の来館者にとっては親しみやすい展示とはいえないし、イヌイトの現代に関する展示は皆無であるので、イヌイトはもはやいなくなっている、あるいは19世紀当時の生活を現在も営んでいるという印象（誤解）を来館者に与えかねない内容となっている。

デンマーク国民はグリーンランド・イヌイトの現代について、学校の社会科教科書などを通じて、国民一般がよく知っているそうであるが、毎年数万人の外国人来館者がこうした展示によって、イヌイトは100年前と変わらない生活をしている、あるいはもはや存在しないという誤った印象をうける可能性があるという指摘に対して、当博物館の学芸員もその可能性を認めた。現在の展示のあり方に対して館内で反省されており、イヌイトとの共同制作をして2010年をめどに展示を全面的に改装する計画がある。



写真5

2. グリーンランド国立博物館 (Nunatta Katersugaasivia Allagaateqarfialu : Greenland National Museum、ヌーク)

1966年に設立した当博物館は、1979年にグリーンランドの自治 (Home Rule) が成立したのに伴い、デンマーク国立博物館にあるグリーンランド由来の文化財を徐々にグリーンランドに返還することが決まり、当博物館が主な受け入れ施設に指定された。1984～2001年の間、デンマーク博物館から130,000点の文化財の内、35,000点が返還されている。

当博物館では、4000年前からのイヌイトの歴史と生活のほかに、デンマークによる植民地支配に関する展示につづき、グリーンランド・イヌイト (カラールリト : Kalaallit) の現代の様子を示す写真展示がある (写真6、7)。

3. フィンランド国立博物館 (Museovirasto : The National Museum of Finland、ヘルシンキ)

当博物館では、サーミの展示は歴史的 (1920年代までの収集品) な内容であるが、その理由は、北へ約1000キロメートル離れているイナリ (Inari) にあるサーメ [サーミ] 博物館 (Saamelaismeseo Siida) で新しい (現代) 民族資料を収集・展示して、「現代」の資料を国立博物館で収集・展示しないという合意になっている。両博物館は資料収集において競争しない (国家予算で資料収集しないこと) という協定により



写真6



写真7

分業することになっている。国立博物館では、現代の様子は1999年 (冬) 前後に撮影したビデオを上映し、昔から変わらない生活ではないこと、今にも生きている文化であることを来館者に意識させている。また、国立博物館は収蔵品をネット上に公開しているが、ネット上で最初に公開されたのがサーミの資料であることによって、国立博物館がサーミを重視している証 (あかし) であると言われた。それでも、観光客は飛行機やバスで遠く離れているイナリのサーメ博物館まで足を運ぶことが稀であるので、ヘルシンキの展示がサーミの「現状」と思われる可能性がある。

これに関して、権威のある国立博物館で「歴史的な」展示しかないことのため来館者が誤解しないかという問いに対して、イナリとの分業事情を十分に資料解説パネルに提示しておらず、改善の余地があると学芸員が認めた。

フィン人に関する当博物館の展示を観て、「歴史ホール」にはサーミに関する展示は一切ないし、フィン人の資料は数千㎡ (推測) にわたって、先史時代から現代までの展示が充実していることから判断して、サーミは言われたほど重視されているのだろうかという疑問をぬぐいざることができなかった。

C. 南欧の博物館

イタリア、スペインとポルトガルの博物館を調査した結果、植民地時代の先住民への支配の影響をテーマとした展示も解説もなかったことが明らかになった。そうした展示が忌避されていることは、南欧博物館の関係者の非公式発言によってかえって明らかになった。

1. 国立先史・民族学博物館 (Museo Nazionale Preistorico Etnografico "L. Pigorini"、ローマ)

調査の研究目的である「植民地支配史と博物館における先住民の展示の相関関係」に関して、イタリアでは植民地支配史を忘却するという、皮肉を込めたコメントがあった。19～20世紀の植民地獲得競争に負けたイタリアはエチオピアやソマリア (ソマリランド) をようやく植民地として得たが、第2次世界大戦後、「忘却」しようとする国の姿勢にならって、博物館で

も先住民というテーマを忌避する様子である。

展示を観て、アフリカ、オセアニア、アメリカの展示の構想は、「接触」直後の古い物を各展示場の入り口に置き、歴史的経過を追って現在まで見せるように努力しているというが、植民地支配による影響などに関する展示がないことは明らかである。

展示資料は冒険家、探検家によって略奪を含めて入手した物であるとか、1870年トリノ万国博覧会や1942年ローマの万国博覧会贈与品、そして国内博物館から移譲された収蔵品などの資料であるとして、植民地支配という状況において入手した資料はないとする学芸員の話にはうなずけなかった。

2. 人類学・民族学博物館 (Museum of Anthropology and Ethnography、フィレンツェ)

イタリアの旧植民地であるエチオピア、エトリアとソマリアの資料が多く収蔵されているフィレンツェの人類学博物館に行くよう勧められて訪れたが、その展示の様子を観て、いわゆる「伝統的」な展示しかなく、文字通りほこりをかぶっているような物が展示ケースに列べてあるという古典的な民族誌的な展示であり、この博物館でもイタリアの旧植民地に対して関心がない様子がかがえた。

3. イタリア：世界文化博物館 (Museo Delle Culture Del Mondo、ジェノア)

展示ホールでは、2000年に当事者の協力を得て収集した北アメリカ・インディアンホピと草原地帯のクリーの資料が展示されている。その展示のために、ホピとクリーの方を招き展示と解説を指導してもらった。展示品資料をなるべくガラス・ケースに入れなくて、多角度から見られる工夫をして、来館者が展示(物)との「対話」ができるように心がけたという。展示資料をガラス・ケースに入れると、命のないオブジェになってしまい、ビニル袋に入れると資料が「息ができない」と2人の指導者が主張した結果、きわめて斬新な展示になっている。

当博物館の展示思想は隠喩 (metaphor)、感性 (emotion)、資料との対話・コミュニケーション (exchange) を通じて、展示物に息吹を吹き込んで、その息吹を来館者が感じとることをしている。その哲学を実現すべく、クリーの子ども埋葬のディオラマを床に埋めこみ、その上に厚いガラス板でふたして来館者が埋葬に「参加」する展示を作った。この展示ケースには、真ん中に葬送装束を着せた人形を白い砂利 (死、もしくは死の世界の象徴) の上に仰向けに置き、回りにモカシン (履き物) などを列べている (写真8)。「死んだ子どもの墓」に、19世紀の全寮制学校で実際に使われた「青目」の人形を置いていることは、植民地支配への静かだが痛烈な抗議が込められている。しかし、残念なことこのことを伝える資料解説パネルがないので、一般の来館者には植民地支配をなじるこの展示の皮肉が伝わるかどうか疑問だった。

全体的な印象として、当博物館では先住民としての社会的、法的地位が確立している北アメリカに関して



写真8

の斬新的な展示を高く評価できるが、イタリアの旧植民地であるエチオピア、エトリア、ソマリアに由来する収蔵品に対して、どのように収集され、それぞれの集団においてその資料がどのように位置づけられていたかに関する情報はないことが残念であった。

当博物館長のインタビューでも、イタリアは植民地に対して、博物館では忘却、没却という態度が優勢であり、どこも旧植民地の歴史とその様子を真正面からとり上げないという指摘は、ローマの国立先史・民族学博物館で聞いた話と同じであった。

4. 市立自然博物館 (Museo Civico di Scienze Naturali、ベルガモ)

この博物館は自然科学博物館であり、展示物のコンテキストを解説する展示構想であるので、人間集団に関しては、動物や昆虫の生活環境を提示するのと同じやり方であり、展示される集団の文化や歴史、現代をとり上げていない。また、ここでもイタリアは旧植民地のエチオピア、エリトリアやソマリアの植民地支配当時の情報を意識しない、忘却、没却すると担当者が認めた。また、ローマの国立先史・民族学博物館と同様に、植民地時代に収集されたのではなく、探検家などが主に19世紀に物々交換で入手したものだそうであり、略奪された性格のものではないという。

5. 民族と文化資料館 (Museo Popoli e Culture、ミラノ)

法王庁立海外布教研修所 (Pontificio Istituto Missioni Estere: PIME) 付属の施設として当資料館は、海外で布教する宣教師に対して異文化理解などを教授することが設立の理由であり、現在もその目的を果たしている。収蔵品は宣教師たちが1850年代から1980年代にかけて現地で入手したものである。ほかのイタリアの博物館に比べて各地域の民族に関する現代の写真が多く、旧植民地の現地人の現状がある程度把握できるようになっていることに、派遣する宣教師を教育するこの施設の姿勢が表われている。

布教活動が世界各地の先住民の文化と社会におよぼした影響に関する解説を法王庁の施設に望むのも、無理であろう。

6. 市立民族学博物館 (Museo Etnologic、バルセロナ)

数年前にフィリピンの特別展を実施したとき、展示に対して在スペインのフィリピン人から抗議を受けたことがあるため、フィリピンに関して神経を使うが、16～19世紀の南アメリカの植民地史に関する展示に対しては抗議もなく、特別に注意していないと学芸員が語った。

南アメリカのスペイン旧植民地時代の展示はなく、展示は先史時代の土器などの遺物の展示につづき、20世紀前半の「伝統」文化展示だけである。ヒバロ(Jivaro; Shuarとも)の「伝統」文化の資料解説パネルは「The path to cultural assimilation: 文化統合の道」とあり、19世紀末まではヒバロは外界とほとんど接触なかったと説明パネルに書いてあるが、この時期にすでに欧米からの宗教的および経済的な影響がヒバロ文化に入り込んでいた。現在は採集狩猟経済から農耕に生業活動を変え、キリスト教へ帰依しているヒバロの同化が進んでいることに関する植民地支配の影響にふれておらず、そうした変化は「自然」に起きているニュアンスであった。

全体的な印象として、スペインが営んでいた北・中・南米の植民地時代の先住民は意識されない一方、バスクや、分離独立志向の強いカタルニャに対しては批判されないよう、博物館関係者が苦心していることが強く感じられた。

7. アメリカ博物館 (Museo de America、マドリッド)

「新大陸」の先住民について、スペインが経営した植民地を全面的に肯定する印象の展示であった。15世紀初頭の先住民の様子(「伝統」と考古学資料や航海術の詳細と植民地支配が先住民の文化と社会に寄与した効果的な展示が数千平方メートルにわたっている。植民地時代のスペイン人の様子がつぶさに展示され、スペイン人の探検家の活動、植民地におけるスペイン人の生活と文化に関する展示、キリスト教の大聖堂の100分の1の模型はあったが、現地人(先住民)への影響はどの展示からも読みとることができなかった。先住民が経験した懲役や奴隷制度、伝染病の影響などについて一切ふられていない。

8. 国立人類学博物館 (Museo Nacional de Antropologica、マドリッド、2004年までは国立民族学博物館)

館長にコロニアリズムと博物館展示について研究していると調査の目的を説明したら、博物館に関しては、コロニアル・ディスクールを研究する意義は時代遅れのことであり、かつての植民地の住民と「われわれ」はいま対等・平等であるので、植民地時代はどうかこうだと論じても仕方がないことだとたしなめられた。ポリティカリー・コレクトネスには感心しないともつけ加えて、人類学はもっと透明な学問であり、博物館の展示は政治とは無関係であるとも、館長が力説したのである。館長の考えの通り、当博物館には、植民地や先住民に関する展示は一切ない。

バルセロナとマドリッドの博物館では、国内のバス

クに関する展示を見いだせなかったことを含めて、南欧の博物館は旧植民地における「先住民民族問題」を意図的に無視している印象をいよいよ強くしたのである。

ちなみに、訪れたスペインの博物館のいずれもバスク民族の展示を行なっていなかったことは、「先住民民族問題」へ拒絶反応の傍証となっているように思えてならない。

9. 国立民族学博物館 (Museu Nacional de Etnologia、リスボン)

常設展示場は改装中のため観ることができなかったが、マリ(フランスの旧植民地)の仮面と体全体をすっぽり覆う「衣装」をテーマとした特別展はあった。効果的な展示だが、植民地的な影響について解説がない。

学芸員に植民地支配の歴史についてたずねたが、その問いに対してコメントしてもらえなく、「先約があること」を急に思いだしてそそくさと立ち去って行ってしまった。

10. マカオ科学文化センター (Centro Cientifico e Cultural Macau、リスボン、中国語で「文化博物館處」)

ポルトガルがアジアへ進出した歴史、中国を中心としたアジア貿易の様子、植民地化以降のマカオの展示が多く、ポルトガルが中国に進出(侵出)した1529年と、マカオがポルトガルの「租界地」になった1557年以降の様子が手に取るようにわかる工夫が施されている。当時の中国人などの日常の様子がないことについて館長にたずねると、中国人社会は閉鎖的であり、その生活や社会に関してほとんど記録することができなかったためだという。

館長室での談話によると、ポルトガルでは1970年代以降、植民地全般、そしてアンゴラ、ギニア、モザンビークの独立戦争は博物館関係者の間ではタブー視されている。つまり、歴史は歴史、我、過去は関知せずという態度は行政においても、博物館関係者の間でも支配的であり、博物館運営と展示に影響しているという。この姿勢は南欧全体で顕著である。

D. 西洋の博物館

1. 大英博物館 (British Museum、ロンドン)

大英博物館の民族資料は人類博物館 (Museum of Mankind) にあった時期(1970～1997年)に比べて、民族展示スペースは少ない。人類博物館時代には一般的(introductory)展示のほか個別文化・集団の展示もあったが、大英博物館に民族部門が移されて、順次に新しい展示を設置している。これまでにメキシコ、北アメリカ(写真9)、アフリカの常設展示を設け、南アメリカと太平洋域の展示構想が練られている。

展示ホールを観た印象は、「伝統」と現代が調和されていると感じた。北アメリカ先住民に関する展示では、「動物に敬意を」(Respecting animals)の展示ケースには、伝統的な資料の加えて現在の狩猟様子を示



写真9

すカラー写真がある。「伝統的治療」(Your life is in their hands)というケースでは、「伝統的」な治療のほかに、AIDSに関連してタンザニアでの伝統的な様子の説明に、現代的な社会問題に関連づけている。

2. 人類博物館 (Musée de l'Homme、パリ)

当博物館の民族資料の大半は、2006年6月に開館したムゼー・ドゥ・キー・ブランリー (Musée du Quai Branly) に移され、人類博物館において形質人類学の視点から人類の進化の展示が中心であるの、調査対象となる資料はなかった。

3. ムゼー・ドゥ・キー・ブランリー (Musée du Quai Branly、パリ)

当博物館では、民族資料を芸術 (art) として重視する展示構想であるような印象をうけた。ヨーロッパ各国の博物館長会議のメンバーが2004年にムゼー・ドゥ・キー・ブランリーの建設現地を訪れた印象は、モノ (資料) とハイテック展示技術 (優れた保存措置、写真などの綿密な保存記録、芸術的な展示など) が目立って、過去と向き合う姿勢がないというものであったことは、私 (本多) がうけた印象と合致している。

憶測であるが、このような方針は博物館の収蔵品が収集された植民地主義の背景を精算するために、民族資料、とりわけ旧植民地で収集した資料を「貴重な人類遺産」、すなわち資料を芸術・美術品として扱い、資料収集の背景にある植民地主義的な状況を直視しない措置であると私が感じたのである。

全体的な印象として、ヨーロッパでは、植民地的な状況を具体的に示さず、植民地支配に関する展示はない。

E. 中国

欧米諸国と中国の政治体制が異なっているので、国際的に先住民とされる中国の少数民族は社会主義国家中国の博物館展示の様子と、調査したヨーロッパの博物館の様子と比較する。

56の民族があるとされる中国では、「各民族が一律に平等である」という方針で1949年建国以来、民族管理が行われてきた。現在の中国でいう民族には、国民・民族・族群 (エスニック・グループ) の3つの意

味が含まれている。したがって、中国博物館での民族展示は単に「見る」「見せる」「見られる」の関係性に還元できるものではなく、55の少数民族の確立と再生産は少数民族自身にとって必要なものとして、受け入れられている。

中国では1949年の建国以来、多くの民族調査団が少数民族地域に派遣され、民族識別を行っていた。かつて多数存在していたエスニック・グループは「分類」や「合併」、「創作 [創造]」などの手法を通して55の少数民族に分けられた。

民族操作は政治的にも人類学的にも批判されることが多いが、そうした批判は中国の少数民族を考える上では一面的である。なぜなら、現代中国における少数民族のアイデンティティは、民族教育を通して再生産される「民族」を維持し、自らの生活環境と「伝統」を創造的に確認し、経済生活に利用している側面があるからである。

ここでは上海博物館、中国民族博物館、中央民族大学博物館、民族文化宮博物館、北京服装学院民族服飾博物館の5つの博物館の観察を通して、少数民族展示の目的や方針、選定される展示品の基準、収蔵すべきものの価値判断、国家政策によって展示の形式がどう変わるか、なぜ古さを強調されるか、何をもって伝統文化と称するか、などの問題について、各博物館の少数民族展示の担当者や関係者に聞き取り調査を行なった。

1. 上海博物館 (上海)

上海博物館「少数民族工芸館」の展示方針として、芸術性、工芸価値と古さの3つの要素が設定されている。ここでいう「芸術性」というのは、漢族や中央民族大学で教育を受けた少数民族出身の幹部らの美的価値観で判断を下したものをさす。また、「工芸価値」には作り方や技術性が求められている。そして、「古さ」とは展示される側の歴史や「伝統」を意味している。

展示品は古いほど展示する価値があると評されるが、その基準は博物館によって異なる。上海博物館の場合は、収集困難などの理由から80年代改革開放以前のもの古いものとして認めている。

展示品の「質」を保つために、3つの基準に達する「精品」を選び、見栄えがよくて民族的な特徴がはっきりしている技術性の高いものしか展示しないと担当者は言う。

一方、「精品」でないものとは、「民族」と称する特徴が曖昧で見栄えがよくないものや、他の民族衣装と似ているものなどをさす。民族識別が行われる以前に、自ら「民族衣装」を持たず、文化的レベルが「低い」とされるエスニック・グループに、国がほかの民族の衣装を参考にしながら新たに創作した「民族衣装」を着せたから、見た目は「似ている」という。

2. 中国民族博物館 (北京)

中国民族博物館は中国国家民族事務委員会に直属している国立の民族博物館であるが、建物自体はまだ建

設されていないため、収蔵品を臨時倉庫に置いてある。常設の展示場所を持たないために、今までの少数民族展示はさまざまなテーマに応じて国内外へ巡回（「出前展示」）する。

中国民族博物館は収蔵・展示・研究・教育・情報提供の5つの機能をもち、工芸・色彩・古さ・文化的内観の4つの基準を展示方針として挙げられる。ここで、「工芸」とは展示品の造形や芸術性、技術性や手間を意味し、「色彩」とは見栄えが華やかであることをさすものである。また、「古さ」は歴史や伝統文化をあらわすものであり、「文化的内観」は展示品に含まれている文化的な価値を意味するものである。

中国民族博物館のスタッフの多くは少数民族の出身者であるために、少数民族のスタッフが自分たちの文化を展示することになる。

苗族出身の副館長は、来館者に合わせて展示品を選び、テーマを決めると語った。たとえば、海外の観光客を対象とする場合、古さより色彩や工芸を重視する。見た目が美しく、技術性が高く、観客を驚かせる効果がある。一方、研究者や専門家を対象とする場合、古さや文化的意味など学術的な価値を全面的に出して展示するという。

3. 中央民族大学博物館（北京）

中央民族大学博物館は1950年代、政府が民族識別をはかるために、多くの学者を辺境地に派遣して、調査と同時に多くの民族文物も収集し、のち大学の博物館に収蔵した。

博物館には常設展と特別展があり、展示品は清朝から民国期、1990年代のものまでさまざまである。モンゴル出身で日本に留学経験のある館長は、博物館の機能が文物の収蔵、展示、研究に限定せず、物を並べる「静態」展示と展示品に動きを加えたショー形式の「動態」展示の方針にもとづいて、新たな民族博物館の方向性の模索を重視している。

今は「民族服飾設計と表演」（民族衣装のデザインとファッションショー）学科を新たに設けて、デザイナーやファッションモデルを養成するとともに、ネットでは「民族概述」（民族概略）、「中華英材」（優れた中国の人材）、「各族人口」、「民族分布」、「自治地方」などの情報を社会に発信している。

4. 民族文化宮博物館（北京）

アチャン族の館長やチャン族の副館長をはじめ、スタッフの多くは少数民族出身者である。民族文化宮は少数民族専門の施設であり、博物館や展覧館のほかに、民族図書館や大劇場、画院やホテル、娛樂城などの部門がある。1950年代から80年代の改革開放まで国家の資金で運営していたが、80年代以後の改革をきっかけに自ら資金を集め展示するようになった。

1988年に設置された常設展「中国少数民族概覧」では、東北—内モンゴル地域、西北地域、西南地域と中南—中東南地域の4つの地域に分けて、網羅的に55の少数民族の歴史や現状、生業活動を陳列していた。その後内容を微調整しながら、90年9月からは「中国少

数民族伝統文化陳列」に変え、少数民族の伝統文化を中心に展示するようになり、少数民族が社会主義の道を歩む前の歴史や伝統社会の様子を来館者に見せようとしていた。

アチャン族出身の館長は、博物館は歴史を展示する場所であり、古いものや伝統的なものを展示すべき場所であると強調したうえで、古さの基準を1949年以前のものとして評する。また、民族衣装の「美」を決めるのが現地の人ではなく、専門家であるという。

5. 北京服装学院民族服飾博物館（北京）

当博物館は北京服装学院の構内にあり、中国ではじめての服飾博物館である。博物館では展示以外に、デザイナー学科の学生に勉強の機会を与え、展示品から学んだものをファッションデザインに還元することを期待しているそうである。

博物館の展示方針について、四川省出身の漢族館長は、「原生态」（伝統的なもの）を展示すべきだと指摘し、収集基準の「古さ」、「工芸」、「文化的価値」の3つを挙げ、展示の意義は多元文化をもつ中国を平和と融合の道に導くためだと語っている。したがって、選ばれた展示品の多くは18世紀から19世紀のもので、一部だけを20世紀初頭から中葉のものである。館長は古さの基準を1966年以前のものであると指摘している。

IV. 博物館展示に関する仮説の検討

ヨーロッパ7ヶ国の博物館の調査に着手する前には、デンマークおよびデンマークの自治領グリーンランドと、カナダの博物館展示を比較して、展示に植民地的な歴史が反映されているという仮説をたててみた。すなわち、カナダにおける過酷な植民地支配と、グリーンランドにおけるデンマークによる穏健な植民地支配の歴史を比較してモデル化すれば、先住民に関する博物館展示を2つの類型に分けることができると予想した。

その仮説の根拠として、博物館における先住民の展示の仕方は歴史的な植民地支配の状況を反映しているのではないかと仮定して、デンマーク（グリーンランド）と、カナダの合計5つの博物館での展示を調査した。調査の結果、デンマーク、グリーンランド、とカナダにはきわだった違いが認められる仮説を検証できたと考えていた。

カナダの両博物館では、過酷な植民地支配の対象となっていた先住民の歴史と文化を展示するとともに、支配への謝罪を込めた展示で明示されている。一方、デンマークの国立博物館とグリーンランドの博物館では、イヌイト文化の展示は仮説の前提に合致した、過去の植民地時代に対する謝罪、贖罪に関する展示が認められなかった。

ともに植民地的な状況におかれてきた先住民であるが、デンマークとグリーンランド、そしてカナダの博物館に認められる展示の違いは、それぞれの植民地支配的な状況の結果であると考えた。すなわち、グリー

ンランドにおいてデンマークが行なった植民地支配は真の意味での温情主義 (paternalism) を基調とした支配であったのに対して、カナダによる先住民政策は独善的かつ圧政的だったことが展示の哲学に反映されている。

植民地支配的な歴史が博物館展示に反映されているというモデルを検証するために、植民地支配のあり方を比較した。

A. デンマークとカナダ両国の植民地支配の比較

グリーンランドでは、イヌイトのいわゆる「伝統的」な生活を温存させる政策を植民地行政官とデンマーク政府が1950年代まで守っていた。カナダは、政策的に一ヶ所の「人工村」にイヌイトを集住させた結果、アルコール依存や伝染病などの問題が多く発生した。グリーンランドでも、もちろん結核などの病気はあり、アルコール問題などもあるが、カナダのように一つの地域のイヌイトが全滅するほどの伝染病は発生していない。

B. 宗主国との地理的距離と植民地支配の違いについて

グリーンランドは宗主国デンマークから海を隔てて3000キロメートル離れており、飛行機で4時間半がかかる距離である。遠く離れていることもあり、デンマークの穏健な植民地支配では、グリーンランドの先住民が「本国」に攻めて来る心配がなかったからとする解釈がある。本国から遠く離れている島であるグリーンランドの範囲が自ずと決まっているので、本国とイヌイトの間に領土問題も起きない。このような地理的条件だから、本国のドミナント社会にとって脅威ではないことが、穏健な植民地支配につながったという解釈である。

それに対して、カナダでは、先住民の住む地域は主流 (ドミナント) 社会の居住域とは陸続きであるので、常に「土地」と自治・自律をめぐる軋轢があった。さらに、カナダの先住民が求める「故土」の返還はそれぞれの国土全体に及ぶことを主流 (ドミナント) 社会が懸念していることも、先住民とドミナント社会の軋轢と対立に拍車をかけてきたともいえる。

しかし、宗主国と植民地の地理的な距離は、植民地支配の厳しさを決定する要因ではないことが次の事例に照らして明白である。北欧諸国とは陸続きのサーミは、カナダのイヌイトと同じ地理的な状況にあるが、サーミと支配者との間に武力衝突はほとんど起きていない。宗主国から距離だけでは説明がつかないということが明らかである。

C. 「開発」の違い

政策の違いの背景には、先住民の居住地における「開発」の違いが要因となっている可能性がある。グリーンランドには、デンマークは海洋資源の獲得に集中していたため、陸上での衝突が起こらなかったとい

う歴史的背景を考慮する必要がある。内陸は厚い氷河に覆われ、沿岸地帯には飛びとびの陸があるだけで、奥地の「地」がなく、奥水しかない。

一方、カナダの北極地帯は陸地つづきであり、20世紀前半までは毛皮交易が盛んであったし、鉱物資源の開発が行なわれているので、開発する側と先住民の間にはさまざまな利害関係をめぐる紛争が現在も絶えない。グリーンランドは主に海洋資源開発、カナダは陸上の商業活動という違いが植民地政策に影響する要因となっていることも考えられる。

V. 考察

博物館における先住民の展示は、過酷な植民地支配と、緩やかな植民地支配というモデルは、どこまで普遍化できるかを検証するためにヨーロッパと中国の博物館を調査した。調査による結論を先に述べると、提示した仮説は単純すぎる、つまり、植民地支配史だけで博物館における展示を類型化することはできないこと、すなわちさまざまな要因が複雑に作用していることが明らかになった。博物館における先住民に関する展示は、国内に先住民が居住しているかどうか、植民地経営が開始された年代によって影響されていることが判明した。

表1の項目の説明は次の通りである。

「展示」とは先住民を規定されたカテゴリーとして展示があるかどうか。一例を除いて、ヨーロッパの博物館では先住民というカテゴリーすらなく、「先住民」と銘打った展示は皆無である。あるのは、「現地人」とその風俗という、20世紀前半までの古典的な民族学博物館的な展示が中心である。アメリカ大陸やアフリカなどの旧植民地に関して、植民地があったこと、そこで先住民がどのような影響を被ったかについては展示や言及は一切ない。例外的にジェノアの世界文化博物館では、アメリカのホピやクリー (インディアン) はindigeno (先住民<族>) と明記されている。

大英博物館では、北アメリカの旧植民地の展示場はないが、「世界の文化」(World Cultures) ホールに北アメリカの展示ケースで先述のテーマが展示されている。

中国博物館では、少数民族展示の目的は「多元文化」をもつ多民族の中国を象徴することであり、56の民族が各々「中華民族」の一員であることが展示の目的である。

「現代の展示」について、先住民に関する「伝統的な」資料のほかに、その人びとが現在どのような状況にあるかについての情報があるかどうかを調査した。

フィンランド国立博物館の学芸員の説明では、当博物館で1920年代まで収集した資料を展示して、現代の資料はイナリ (Inari) にあるサーメ (サーミ) 博物館 (Saamelaismeseo Siida) に返還しているそうである。しかし、イナリの博物館との「分業」が行なわれていることについて、展示の解説パネルはなく、1920

表1 調査した博物館における先住民展示の比較

地域	情報の種類	展示	現代の展示	植民地支配情報	謝罪	国内に先住民	陸続き	植民地化開始時期
北欧	デンマーク	○	×	×	×	○	×	18世紀
	フィンランド	○	×	×	×	○	○	18世紀
	グリーンランド	○	○	○	×	○	○	18世紀
	カナダ	○	○	○	○	○	○	16世紀
南欧	イタリア	×	×	×	×	×	×	19世紀
	スペイン	×	×	×	×	×	×	19世紀
	ポルトガル	×	×	×	×	×	×	19世紀
イギリス (北米植民地のみ)		○	△	△	×	×	×	16世紀
	フランス ¹⁴⁾	△	△	×	×	×	×	16世紀
	中国	○	×	×	×	○	○	—

凡例 ○=明確に展示・表示 △=曖昧 ×=展示・表示がない

年代までの資料展示だけでは来館者の誤解を招く可能性があるとして学芸員が認めた。観光客は飛行機やバスで遠く離れているイナリのサーメ博物館まで足を運ぶことはそれほど多くはないので、ヘルシンキの展示がサーミの「現代」と認識してしまう可能性がある。

ヘルシンキでは、サーミの現代について1999年(冬)前後に撮影したビデオが上映されており、ステレオタイプ的な誤解を防いでいるとのことである。

南欧の博物館では、先住民そのもののカテゴリーもなく、旧植民地をとり上げることもタブー視されているので、先住民の現代を示す展示も解説もない。

大英博物館では、北アメリカの先住民に関する展示があり、現代に関する情報は展示ケースの中の写真で部分的に示されている。ただし、現在の社会的、文化的現状に関する情報は少ない。パリのドゥ・キー・ブランリー博物館で現代に関する情報はないに等しい状況である。

中国では、少数民族展示の基準に「古さ」が重視され、歴史や伝統文化が強調されている。展示担当者は「原生態」や「伝統」的なものを展示すべきだとされており、「現代」を展示するかどうかについて意見が博物館によって分かれている。上海博物館は、現在着用されている民族衣装は大量に市場に出回っているから展示する価値はないとし、民族文化宮博物館では、博物館は歴史を展示する場所であるために、現在のものを収集するが、展示すべきではないとされている。現在のものはその民族の伝統や歴史が反映してないと考えているからである。

服装学院博物館の考えは、博物館の展示品は「原生態」のような「伝統」的なものに厳選すべきだとして、観光やファッションショーで使う民族衣装を「氾濫文化」と位置づけている。中国民族博物館では、「民族に関する政治や経済、文化や社会生活を展示すること」を博物館の機能とされ、古い資料だけではなく、新しい生活に関わるものも展示する必要があるとされている。ただし、「古い」展示品と「新しい」展示品を使い分けて、学術的な側面から国内外の学者に提示する場合は古いものを見せるが、一般の観光客には、現代の華やかなものを見せ、多民族の雰囲気や伝えればい

いと考えている。

「植民地支配情報」という項目に関しては、旧植民地において先住民はどのように扱われているのか、文化的、政治的な影響に関する情報の有無について調べた。デンマーク国立博物館では、イヌイトの物質資料が豊富に展示されているが、グリーンランドは植民地であったことに関する情報を見いだせなかった。グリーンランドのヌーク博物館では、植民地時代の布教活動を表わす版画、捕鯨基地だったヌークで働くイヌイトの様子を示す水彩画などがある。フィンランド国立博物館では、サーミは長い間植民地的な情況に置かれていたことを語る展示も解説もない。

カナダでは、どの博物館でも植民地支配の様子を告発する展示が多く(写真0895、0162参照)、植民地支配による文化的、社会的な被害への反省も明示されている。

先住民のカテゴリーをとり入れていない南欧をはじめ、ヨーロッパの博物館全体では先住民がどのような植民地的な経験をたどってきたかに関する情報はほぼ皆無である。

「謝罪」について、明確に植民地時代に先住民が受けた被害に対する謝罪を公式に表明しているのは、カナダだけである。たとえば、ローヤルアルバータ博物館では、先住民の児童が強制就学させられた学校の模様の周囲に、そこでの教育が先住民の文化、社会、言語に大きな打撃を与えたことが赤裸々に展示されている。

「現代の展示」の項目では、先住民がこの数十年の間、どのような社会的環境で生活をし、法的地位はどうか、差別を受けているかなどに関する展示があるか否かに関する調査を行なった。「現代」がよくわかる展示はグリーンランド、カナダだけである。

「陸続き」という項目は、先住民とドミナント社会の居住地が陸続きであれば、ドミナント社会と先住民との軋轢が生じる不安があるので、厳しく統治することは、過酷な支配につながることを想定した項目である。16～18世紀に開設された北アメリカ大陸の植民地ではそのような傾向が認められるが、北アメリカ大陸におけるフランスの植民地支配は比較的緩やかであっ

たことを考慮すれば、陸続きイコール過酷な支配図式は普遍的ではないことが明らかである。また、陸続きであるか、ないかに関係なく、19世紀に本格化したヨーロッパ列強によるアフリカなどの植民地支配はおしなべて過酷な支配だったので、陸続きは植民地支配のあり方に関する決定的な要因といえない。

VI. まとめ

本研究で実施した博物館調査は9ヶ国の24施設（カナダ3、北欧3、南欧10、西欧3、中国5）における先住民展示を対象として行なった結果として、次の特徴が認められる。

1. 北欧、北アメリカ、イギリスの博物館では、先住民として分類されている旧植民地の原住民に関する展示がある。
2. 南欧の博物館では、先住民に関する情報は皆無であり、旧植民地の原住民の展示は民族資料にとどまり、旧植民地を語ること自体が忌避されている。
3. 19世紀以降に経営が開始されたアフリカ、オセアニア、南アジアなどの植民地の原住民は、調査したすべての博物館において先住民とされず、その資料は民族（民俗）資料として展示されているのみである。
4. 先住民が現在国内（自治領を含む）に居住しているか否かということが、その国の博物館展示の内容と仕方をもっとも大きく左右させる要因である。
5. 中国の博物館では、展示品の基準に各民族の特徴をあらわす「工芸性」（技術性）や「芸術性」が重視され、差異を強調することで曖昧な民族性を明確にさせて、認定された少数民族の正当性が語られている。

あとがき

本論で北アメリカおよびヨーロッパや中国の博物館における先住民（族）をめぐる展示の現状に関する調査成果を報告した。この調査研究の目的は、国内におけるアイヌ民族の展示、とりわけ「アイヌ民族の現代」を検討するための比較資料の収集にある。

今後の課題として、美術館における先住民資料の扱い方に関する調査のほかに、博物館のメディアとしての機能と来館者への影響に関する調査が必要である。

国公立博物館を中心に選んで調査した背景には、展示の仕方と内容、さらに何を展示するのか、しないのかは主流社会の意向は部分的にせよ、反映されているという仮定があったことである。その仮定がどこまで正当なのかを吟味しなければならないが、この仮定の正当性があることが判明されたら、国公立博物館に対して公（^{ドミニカント}政党）と干渉（^{おびやけ}）かについて考証する必要となる。その糸口として、1998

年の県知事の交代に際して、沖縄県平和祈念資料館での展示構想が変わったとされること——ガマ（洞窟）を模倣した展示では、銃を構える日本軍兵士が母親に幼児の口封じを命じる模様の予定だった展示模型が変更され、日本兵の手から銃がなくなったなど——の事例を検証する予定である。また、当時の日本政府の見解が国立民族学博物館のアイヌ民族常設展示構想にある程度反映されていた可能性についても考証するつもりである。

参考文献

- 大阪人権博物館編
2003『大阪人権博物館紀要』7号、大阪人権博物館
- 木村和男
2005「メイティ：カナダの混血先住民」『北米：講座世界の先住民』(富田虎男、スチュアート ヘンリ編)、pp.340-354、明石書店
- 加藤普章
1990『多元国家カナダの実験：連邦主義・先住民・憲法改正』未来社
- クリフォード、ジェイムズ
2002『ルーツ：20世紀後期の旅と翻訳』月曜社
- 佐々木高明
1986「博物館」『日本の民族学 1964-1983』pp.323-328、弘文堂
- 原 知章
2004「メディア人類学の射程」『文化人類学』69-1：93-114、日本文化人類学会
- 本多俊和（スチュアート ヘンリ）
2005「先住民運動：過去・現在・未来」『先住民の世界』文化人類学研究'05（本多俊和、葛野浩昭、大村敬一編）、pp.253-270、放送大学教育振興会
- 本多俊和（スチュアート ヘンリ）、葉月浩林
2007「アイヌ民族の表象に関する考察：博物館展示を事例に」『研究年報』24：57-69、放送大学
- 吉田憲司
1996「〈異文化〉の展示の系譜：もう一つの人類学史・素描」『思想化される周辺世界』岩波講座 文化人類学 第12巻、pp.12：33-68、岩波書店
- 1998「民族誌展示の現在：表象の詩学と政治学」『民族学研究』62-4：518-536、日本民族学会
- Ames, Michael
1992 *Cannibal Tours and Glass Boxes: The Anthropology of Museums*, Vancouver: UBC Press
- Carbonell, Bettina, ed.
2004 *Museum Studies: An Anthology of Contexts*, London: Blackwell
- Correia, Maria
1998 *Peace, Order and Good Government at Oka 1990: A Limited Anthropological Analysis*, Sacred Lands: Aboriginal World Views, Claims and Conflicts (in

- Oakes, et al, eds.) pp. 69-76, Edmonton: Canadian Circumpolar Institute
- Cummins, Alissandra; Emmanuel Arinze, eds.
1996 Curatorship: Indigenous Perspectives on Post-colonial Societies, Mercury Series, Paper 8, Hull: Canadian Museum of Civilization
- Gad, Finn
1984 History of Colonial Greenland, Arctic; Handbook of North American Indians, Vol. 5: 556-576, Washington DC: Smithsonian Institution
- Karp, Ivan; Steven Lavine, eds.
1991 Exhibiting Cultures: The Poetics and Politics of Museum Display, Washington DC: Smithsonian Institution Press
- Lambertus, Sandra
2004 Wartime Images, Peacetime Wounds: The Media and the Gustafsen Lake Standoff, Toronto: University of Toronto Press
- Simpson, Moira
1996 Making Representations: Museums in the Post-colonial Period, London: Routledge
- Sorensen, Bo
2002 Museum Culture in Greenland, Folk 44: 35-62, Copenhagen: Dansk Etnografisk Forening

(平成19年11月12日受理)